

実践力向上のための OSCE**- 学部・実習前教育における導入の試み -**

国際医療福祉大学 西田 崇大 (008110)

佐原 まち子 (国際医療福祉大学・4690)

キーワード：OSCE，実践力，実習前教育

1. 研究目的

現在、臨床能力を客観的に評価する方法論として、医学部、薬学部を中心に客観的臨床能力試験(OSCE: Objective Structured Clinical Examination)が普及した。一方、相談援助を専門とする対人援助職では、実践力の客観的評価の測定が難しく、従来からソーシャルワーク業務はOJT(on the job training)が重要であり、現場に出た後の研鑽が重要と言われてきた。

本学の精神保健福祉関連の教員(相原, 西田)は、本学の卒業生で精神保健福祉士を取得した臨床家の卒後研修プログラムにおいて、2年間のOSCE導入の取り組みを行ってきた。その成果として、事例、評価スケールの開発と共に、臨床経験年数ごとにおける課題等の傾向も明らかとなった。また、アンケート結果から、開発したOSCEプログラムが「臨床能力向上のために大いに役立つ」75%、「役立つ」35%と、参加者52名全てが肯定的な実感を持つに至った。従って本研究におけるOSCEは、各人のソーシャルワーク展開課題の明確化と実践力の向上のために役立つと考えられた。このことから、学部教育(精神保健福祉援助実習)にOSCEを導入し、臨床能力教育の向上を図ることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

2011年度、本学医療福祉学科4年、精神保健福祉援助実習を履修している学生26名を対象としてOSCEを実施した。評価者は、模擬患者(SP: Simulated Patient)1名、臨床実習指導者と大学教員の構成メンバー2名、合計3名を1組として設定し、模擬患者(SP)には、臨床現場にいる本学卒業生に協力を要請した。その理由として、臨床経験を活かした臨場感を再現しやすい、2年間の卒後研修プログラムOSCEを経験している、模擬患者(SP)実演のための事前準備が円滑である、等が挙げられる。

事例、評価シートは、本学卒後研修において活用した当該研究者達が開発したスケールを使用する。評価項目は、模擬患者(SP)用評価シートが12項目30点、評価者用評価シートが基本的態度13項目30点、面接スキル及びアセスメントスキル24項目60点、の合計120点満点で構成されている。今回のOSCEの課題は、「在宅介護を行っている認知症の妻のインテーク面接」であり、プログラムの主な流れは以下の通りとなる。学生個々に、プログラム開始30分前に面接前の基礎情報の資料を配布し、学生は面接前の準備に臨む

(Preparation), 模擬患者(SP)との面接ロールプレイを実施[20分程度], 学生は面接後に記録をとる, 評価結果と本プログラムで活用した事例のポイント等を学生個々に配布し事後学習, 指導へ役立てる, となる。

研究方法は、アンケート調査および面接評価者による実践力の数値化, また記録シートの記述的質的研究によるものである。「プログラム参加に関するアンケート」においては、各項目について、「非常に思う, 思う, 普通, あまり思わない, 全く思わない」の5段階回答と記述式にて実施した。「プログラム中の面接評価」では、模擬患者(SP), 臨床実習指導者と大学教員の面接場面評価を後に分析した。記録表からの分析においては、プログラム中の参加者個々の記録を回収し、面接を通して「情報 記録化 アセスメント」とつながるプロセスを分析することを試みた。

3. 倫理的配慮

OSCEを導入した本研究プログラムに参加する精神保健福祉援助実習を履修した在生に対して、OSCEの説明に加え、実践力向上のための取り組みであること, そのための効果を研究する説明を行い、文書にて配布する。また、本研究の参加有無に関わらず、学生本人の履修・成績等に不利益が生じないこと, 研究成果を発表する際には、コード化する等の配慮をし、個人が特定されないこと, を保証し、学生の上承を得ることとした。

4. 研究結果

ここでは、学部・実習前教育に導入したOSCEプログラムの主な特徴について整理する。

まず、評価の妥当性を高めるため、複数の模擬患者を動員することへの考慮, 各評価項目と事例の相関性を具体的に示す, 評価者を複数設ける等の対策を講じた。また、事例にあたっては、事例概要だけでなく、主となるポイントを整理し、面接の展開過程に一定の条件を満たさなければ、新たな展開が発動しない等の設定を施した。これにより、複数の模擬患者を動員しても、「生きた事例」としての側面を維持しつつ、客観的整合性を持たすことを可能にした。そして、面接展開の到達度に差異が生じやすくなり、面接スキル, アセスメントスキルの総体としての臨床知を量ることが可能となった。また、アセスメント評価の中に、事例の状況理解度を示す「記録評価」も設定した。今回扱った事例の基本ポイントは50項目で構成され、面接設定時間等によって到達度を変更できるよう配慮した。

今回のOSCEプログラムでは、面接スキル, アセスメントスキル, 記録化のスキルを客観的に評価することが可能となり、学部教育における学生の実践能力の課題の明確化に役立ち、実践力向上のための教育指導を強めることが可能になったといえる。

今後の展望及び課題として、実習前 OSCE 実習 実習後 OSCE のプログラムを確立する, その他、演習等との相関性を踏まえ、実践力向上のための指導上のポイント, プロセスを明確にしていくことを試みることにする。